

私は考える。私は感じる。私は思う。

私, 私と, もう辟易!と私が思う。

もちろん現実社会に生きる私たちは、共通の理念や態度、慣習や決まり事のなかで同じであることを求められ、また自ら他人と同じであろうとする。とは言え、これも裏を返せば、私たちが、それぞれ異なる存在だという前提があればこそそのことだろう。

そうだとしたら——「私」が私以外の人のなかで初めて意識化されるのであれば——、私が究極的に私以外のものと同化を果たせば、「私」は消滅し、そのとき私を含む「一」という、別のものが姿を現わすのではないだろうか。あるいは、そのような同化は内破を引き起こし、私という一つの輪郭が消失するほどの決定的な分裂をもたらすかもしれない。

小林耕平と高橋耕平。二人の耕平が、同化を試みる。

差異やズレといった予定調和の出来事には頓着せず、同化することを、そもそも「同化とは何か」「一致とは何か」との問いと共に、距離を乗り越え、制作を通して希求してみる。

同化は、4つの部屋から成るクマガスクの構造に沿って、4つの段階を経て深化する(はずである)。二人の耕平は、同化を念頭に、共通の課題を掲げて制作に取り組み、その過程でより確かな同化を求めて、新たな方法や課題を設定し、次の取り組みへと進む。

最初の課題は「畏怖を造形化すること」。不意に訪れる「畏怖」の感情は、誰もが経験するものでありながら、目に見える形を持たないがゆえに、同化に向けた最初の取り組みには理想的だろう。「私」という人間のスケールを超えているところもいい。

この任意の課題を手がかりに、同化の取り組みを始めてみたいと思う。二人の耕平は、どうなるのだろうか。

遠隔同化

二人の耕平

小林耕平 × 高橋耕平

2016.10.22 sat.

→ → → → → → → → →

2017 秋

内覧会
2016年10月22日[土] - 10月30日[日] 13:00-17:00

オープニングレセプション
2016年10月21日[金] 16:00-21:00

企画
千葉真智子 (豊田市美術館学芸員)

宣伝美術
大西正一

協力
ART OFFICE OZASA INC.

KYOTO ART HOSTEL kumagusuku

KYOTO ART HOSTEL 京都アートホテル

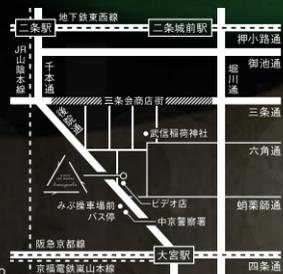
kumagusuku クマガスク

Stay Viewing
宿泊鑑賞料 | 7,000円(税抜) —

*お部屋、ご宿泊人数によって異なります。詳しくはHPをご覧ください。

<http://www.kumagusuku.info>

〒604-8805 京都市中京区壬生馬場町37-3
tel | 075 432 8168 mail | mail@kumagusuku.info





小林耕平 1974-

単純な行為の反復を編集したミニマルなモノクロ映像を出発点に、その作風を段階的に展開させてきた小林耕平。2009年に初めて「言葉/声」を導入すると、状況と行為/それを指示する語りとを巧みにズラしながら、鑑賞者の知覚を遅延させる作品を発表するようになる。やがてそれは、他者のテキストをもとに、その仮説を実践するという形をとりながら更なる飛躍をみせ、対話者との問答によるデモンストレーションや、対話者とのやり取りを他者の撮影に委ねた映像作品へと広がり、翻って、絵やオブジェクトを巧みなシンタックスによって配置したインスタレーションにまで展開するようになる。

主体中心の認識論的世界観に揺さぶりをかけ、自ら新たな世界の生成の場にスリリングに身を置こうとする「小林」耕平は、何を見せてくれるのか。

高橋耕平 1977-

自己と他者のズレ、知覚や認識の多層性に着目し、構造的な映像作品の形に落とし込んできた高橋耕平。2013年に美術愛好家「原田さん」に取材した映像作品を手がけたのを契機に、作品は大きく展開し、以後、特定の個人や特定の場所に取材したドキュメンタリー形式の作品を中心に手がけるようになる。その際、主題となるのは、記憶の継承と忘却や断絶、あるいは個人と個人、個人と集団の間に生じる齟齬や共感であるが、高橋による対象への絶妙な距離感—真摯でありながら核心にすっと入り込む気安さと、感傷的な色合いを排除したユーモア—によって、作品には常に、独自の色合いが担保されている。

自らを媒介に、他者の記憶や場所の記憶から思わぬ姿を浮かび上がらせる「高橋」耕平は、何を見せてくれるのか。

